

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「コタキナバル・リエゾンオフィス邦人向け講演会」

日時：2016年1月9日（土）15：00～17：00

場所：コタキナバル日本人学校

参加者：35名（講演者含む）

内容

冒頭に、AA研コタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）の拠点長を務める床呂郁哉所員から挨拶と趣旨説明があった。本講演会は KKLO のアウトリーチ活動の一端として KKLO に関係する研究者の研究活動の成果の一端を一般の（専門家以外の）方々に公开发信することを目的としており、昨年度に続いて今回が三回目である。また同拠点長より、今回もコタキナバル日本人会の全面的なご協力によって開催が可能となったことへ謝意が述べられた。続いて、AA研の坪井研究員による講演が行われた。要旨は以下の通り。講演後は、イスラム教の伝播の過程やイギリスの植民地政策、マハティール政権下の政策など、さまざまな点に関して活発な質疑応答が行われた。

講演「ブミプトラとは誰か？—マレーシアにおける民族と政治」

坪井祐司（AA研研究機関研究員）

マレーシアは多民族社会であり、民族はその国家や政治のうえで重要な役割をはたしてきた。その象徴の一つがブミプトラ（マレー人およびサバ・サラワクの現地人の総称）を優遇する一連の政策である。講演では、マレーシアにおける民族政策の展開と多民族社会のあり方について、歴史的な視角から振り返った。

マレーシアを構成するマレー半島、ボルネオ島には熱帯雨林が広がり、人口は極めて少なかった。くわえて、海に囲まれた海域世界であり、外から常に人が流入する流動的な社会であった。前近代には、港で交易を管理する港市国家が発展した。その典型であるマラッカには外国人商人の代表者である4人のシャーバンドル（港務長官）がおり、王権は宮廷に外国人を取り込むことで権力を維持した。マラッカはその後ヨーロッパ勢力に支配されるが、そこにもカピタンという首長がおり、華人、インド人などの外来者の集団が首長を持つ構造は変わらなかった。

19世紀になると、イギリスの植民地統治が開始されるが、その形態も間接統治であり、半島部ではマレー王権が残された。そこに中国、インドから移民労働者が到来し、マレー人、華人、インド人という民族の枠組みができあがった。現在のサバ、サラワクでも現地

人の首長を通じた行政制度が築かれた。植民地体制下においても、多民族の指導者が一つの秩序を構成する構造がみられた。行政においては、マレー人が「現地人」として外来の移民から保護されるべき存在みなされ、官僚の登用や土地の保有などの分野で優遇政策がとられた。これらは、現在のブミプトラの優遇政策の起源である。

現在のマレーシアという国家も、民族集団がそれぞれ政党を結成し、それらが交渉により権力を分け合う形で運営されている。半島部のマラヤ連邦の独立の過程では、マレー人、華人、インド人の政党が連盟を結成し、選挙に勝利することで与党体制が形成された。マラヤ連邦の憲法制定の過程においては、マレー人と華人・インド人政党の交渉により、後者の市民権に配慮する代わりに前者の「特別な地位」が認められた。その後サバ、サラワクを含めてマレーシアが結成されるが、これはサバ、サラワクが疑似的な民族としてマレー人、華人、インド人の連立政権に加わったともとらえられる。サバ、サラワクの指導者は、マレーシア加入の交渉の過程で、州の独自の権限を認めさせるとともに、「ブミプトラ」としての特権的な地位を手にしたのである。人口が流動的なマレーシアでは民族の枠組みも常に再編成されてきたが、多数の民族集団により秩序が形成される社会の多民族性は一貫しており、集団の形成と交渉のプロセスが政治であるといえる。

以上